

「信仰の火に思いを寄せる」

2021年9月

中山 昇
(1925~2019)



しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、
救われるであろう。

(コリント人への第一の手紙 3章15節より:日本聖書協会1954年改訳版)

昭和の戦争の時代、私の属する河内長野教会は、伝道教会の中でも最小の一つで、礼拝に集う信徒は10人に満たず、自立もままならぬ状態でした。浪花中会⁽¹⁾では、教会名の「河南(カナン)教会」をもじって、「カナワン教会」と呼ばれていました。「カナワン」とは「厄介な」とか「困った」を強調する、この地域の俗語であります。

その教会が、戦後、姿を変えられていきました。私たちはその後の教会の歩みの中に人間の思いや努力を超えた、神様の御手の業を目の当たりにさせていただきました。

神様は人の思いに、不思議と見えることを起こしてくださいます。私は日本基督教団河内長野教会の一信徒として、学校法人清教学園中学校の創立に、参加させて頂いたことで、主のお導きをつぶさに体験させていただいたものの一人であります。当時河内長野教会の会員は20人ばかりで、教会学校の中高生の30人が夜の清教塾⁽²⁾に参集していました。それは、戦後の教育に挑戦する若き同志としての中高生の集いでありました。全員が集まれば、入り切れないような田舎の小さな教会の群れであるのに、自分たちの中学校が欲しいと言いつつ、無一物で、頼るべきはただ先立ちたまう神様のお力のみという状況の中で、御言葉によって養っていただきました。

神から賜った恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういうふうに住てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れてそれを明らかにし、またその火はそれぞれの仕事かどんなものであるかを、ためすであろう。もしある人の建てた仕事そのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう。

(コリント人への第一の手紙 3章10~15節)

建設運動⁽³⁾が全く五里霧中の中で、私たちの拠り所は、神様がどんな道を開いてくださるのか、それを尋ね、祈りながら、働かせて頂くことでありました。不安で、不安でたまらないことも、しばしばありました。その日々はまさに火の中をくぐり続けながら、「神様、今日は何をお示しくださるのでしょうか」と問いつつ、聖書の学びを共にさせて頂く一歩一歩でありました。

神様は無一物の群れに、思いもかけぬ土地を備え、思いに勝る校舎を建築させ、思いがけぬ人材を整えてくださいました。そして、気がつくとも中学校開校の日までに要した日数は僅かに1年と3ヶ月でありました。

(次ページに続く)



その賜物を生かして
互いに仕えよう
中山昇

それから61年⁽⁴⁾、今年は中、高、幼稚園を合わせて2,400人の園児、生徒が通う学校にまで成長させてくださいましたが、火の中をくぐっていることには、いささかも変わりはありません。信仰を問われる試練は神様から投げかけていただく火です。底には救いの約束が土台に据えられています。この御言葉に導かれる信仰を、大切に継承してゆきたいと祈ります。

※ 2021年9月の「今月の聖句」では、創立70周年を迎え、学園創立に携わった者たちを支えた聖句を改めて覚えさせていただく機会を持つことにしたい。

出典：『希望のみなもと—わたしを支えた聖書のことば』（船本弘毅 編、燦葉出版社、2012年）

P.334～P.337より *表現の一部を法人事務局により校訂 *燦葉出版社によるご承諾をいただき掲載

※ 中山 昇(なかやま のぼる、1925年7月18日～2019年11月11日)

1925年 河内長野生まれ。1945年8月に津山予備士官学校で敗戦を迎え、大阪第一師範に復学。清教学園の創立に教会学校の生徒たちと共に携わり、清教学園中学校・高等学校の教諭、教頭、校長、理事長、名誉理事を歴任し、2019年11月11日に94歳で天に召されるまで、キリスト者としての信仰と清教学園の教育振興に自らを捧げる生涯を歩んだ。

【註】(1)浪花中会:

それぞれの教会の長老会議を小会、複数の教会から代議員が派遣されて開催される長老会議を中会、さらに広範囲になる長老会議を大会という。なお、河内長野教会の前身である長野講義所は1905年7月18日に創立され、その後の1910年10月、長野・富田林両講義所を合わせた河南教会として浪花中会にて承認された。

(2)清教塾:

清教学園の前身となった河内長野教会の教会学校(日曜学校)。1948年4月15日に中学生を中心とする23名が集って開塾。「基督教主義を教育の基盤とし、己を知り、隣人に仕え、国を愛し、世界を友とし、神に帰一せんとする人格を養う」、「知識の水準を高め、自主的学究の補導をなす」という二大原則を掲げ、清教学園設立に至るまでの間、週間の毎夜、主に中学生が集い、聖書と教科の学習、また夢を語り合う対話が重ねられた。

(3)建設運動:

1949年12月に清教塾の塾生たちが立ち上がり行った「すくど(松の落葉)拾い」の売り上げ770円は、清教学園設立の初穂となった。キリスト教を土台に据えた学校の必要性に突き動かされた多くの人々の想いのもと、清教学園中学校の創立を目指す運動が起こされた。

(4)61年:

この文章は、2012年、東日本大震災(2011年)により人々が深い悲しみと苦しみに苛まれていた中、学園60年余の歩みを通じて示していただいた神様の恵みを振り返りつつ、私たちはいかなる中にもあっても信仰によって尽きせぬ希望にあずかせていただくことができるということを証したメッセージである。